

氏 名（本籍）	やま ね ち か こ 山 根 千佳子（東 京 都）		
学 位 の 種 類	博 士（デザイン学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4458 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	ファイバー・アートの研究 －日本の作品における素材特性と造形表現を中心に－		
主 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	齊 藤 泰 嘉
副 査	筑波大学教授		穂 積 穀 重
副 査	筑波大学講師	博士（工学）	山 本 早 里
副 査	京都女子大学助教授	博士（デザイン学）	常 見 美紀子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本におけるファイバー・アートの特徴を明らかにすることを主たる目的としている。そうした課題設定の背景には、これまでにファイバー・アートの歴史的展開や造形的特質に関する客観的分析が、必ずしも十分にはなされてこなかったという研究状況がある。

ファイバー・アートとは、ヨーロッパにおけるタペストリー復興運動から誕生した繊維素材による造形芸術であり、その誕生の 1960 年代から現在まで、ヨーロッパ、アメリカ、アジア等を中心に多様な展開を見せている。過去 40 年間、ファイバー・アートは、さまざまな展覧会で紹介されているが、著者は、それらの展覧会における作品解釈や評価は、主観的見解にとどまることが多いとしている。そうした状況をふまえ、ファイバー・アートの国際的な動向も視野に入れつつ、日本人作家によるファイバー・アートの特徴を客観的に分析しようと試みたのが、本論文である。

本論文は、ファイバー・アートを研究対象としている。著者は、特にファイバー・アートの創造行為に関心を寄せており、ファイバー・アートの理論研究や歴史研究にとどまらず、作品のフォルムやスペースが、造形素材からどのように生成してゆくのか、すなわち、制作過程に内在する論理の解明に力を注いでいる。したがって、本論文の主たる研究対象は、ファイバー・アートの造形原理とすることができる。

では、ファイバー・アートの造形原理を客観的に解明するにはどのような方法があるのか。具体的には、第 1 段階では、「作品分析」を行なっている。これは、ファイバー・アートにおける素材と技法、形態と展示方法を主軸として、客観的にその特徴を抽出し、分析する。第 2 段階では、上記の作品分析をもとに繊維素材と表現効果の適合性について考察し、ファイバー・アートの特徴に対する「総合的見解」をまとめるというものである。

本論文は、以上の研究目的と方法をもとに全 4 章から成る。第 1 章は、「ファイバー・アートの変遷と概念の推移」と題し、ローザンヌにおける国際タペストリー・ビエンナーレでファイバー・アートが誕生したきっかけと展開について述べる。また、現在ファイバー・アートの中心的存在となりつつある中国、韓国、日本での活動を把握する。さらにファイバー・アートの概念規定についても考察する。第 2 章は、「造形要素による作品の検証」と題し、日本で開催された 33 年間のファイバー・アートの展覧会を取り上げ、そこ

で用いられた素材と技法、形態と展示方法を統計的手法により分析する。この結果からファイバー・アートの客観的な特徴を述べる。第3章は、「造形要素と表現効果」と題し、ファイバー・アートの制作過程を素材、技法、展示方法の各視点から図式化する。この図式をもとに素材の形状と性質を分類し、作品例をあげながら、繊維素材と表現効果の適合性について考察する。第4章は、「ファイバー・アートの特徴」と題し、ファイバー・アートが出品されている展覧会の資料を分析し、ファイバー・アートが、工芸、現代美術、デザインの各領域とどのような関連にあるのかを明確にする。また、日本におけるファイバー・アートで使われる素材が持つ特性に対する日本人作家の造形イメージを抽出し、制作における応用について考察する。以上が、本論文の構成である。

現代日本におけるファイバー・アートの特徴を解明するという本研究の主たる目的に関し、以上の考察から得られた結果は、主に以下のとおりである。日本のファイバー・アートは、①1970年代では工芸、1980年代では現代美術、現在ではデザインと一緒に紹介されることが多い、②繊維素材の美しさ、繊細さ、強靱さなどの素材特性をそのまま簡潔に生かした造形表現が生み出されてきた、③織り、染めなどの伝統的技法に独創的な工夫を加えて新たな表現を生み出しているが、その基本は、繊維素材または柔軟性のある線状、面状の素材を織り、編み、フェルティング等の技法を独自に用いることである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

ファイバー・アートは、工芸や現代美術、さらにはデザインとも密接に関連した領域であるため、その概念や範囲の規定は容易ではない。また、その中心地が、ヨーロッパからアジアへと移行しつつあるなどの変化が続いているのが現状である。著者は、このような状況に対し、まずファイバー・アートの変遷過程を検証し、ファイバー・アートの多様な展開を確認している。その上で、ファイバー・アートの概念規定の明確化を試みている。そのために著者の設定した方法は、素材特性と造形表現との関連性を中心に、ファイバー・アートを造形要素の点から客観的に分析するというものである。こうした造形原理に基づくファイバー・アートの考察は、独創性の高い研究と評価しうる。

また、日本におけるファイバー・アートの展開については、33年間168作品の主要材質と形状について統計的に分析するなど実証性も高い。このような研究は、今後のファイバー・アートの制作や展示、美術教育等に応用が期待される。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。